

エリサベツとマリヤに見る神の秘密

ベレーシート

●クイズです。「主によって語られたことばは必ず実現する」と言った人はだれでしょうか。正確には、「主によって語られたことばは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょうか。」です。

答えは、祭司のザカリヤの妻「エリサベツ」(ヘブル語表記は「エリーシェヴァ」**אֵלִישֶׁבַּע**)です。実は、大祭司のアロンの妻の名前も「エリサベツ」と同じ表記ですが、聖書では「エリシェバ」となっています(出 6:23)。では、だれに向かって語られたのでしょうか。答えは、ヨセフの許嫁(婚約者)であった「マリヤ」(ヘブル語表記は「ミルヤーム」**מִרְיָם**)です。今回は、この二人にまつわる秘密をヘブル的視点から掘り起こしてみたいと思います。

1. エリサベツとマリヤとの共通点

●この二人には、上記のことばを共有できる関係にあったということです。
この二人には、以下のように、共通点があります。



【イメージ図】

- ① 二人は、御使いガブリエルによってそれぞれ、懐妊、受胎の告知を受けました。
- ② 二人は、いずれも子を産んだ経験がありません。「エリサベツ」は「不妊の女」(「アカーラー」**עֲקָרָה**)、「マリヤ」は「処女」(「ベトゥラー」**בְּתוּלָה**)でした。
- ③ 二人は、神が自分たちになされた常識を逸したことを信じ、共に喜び分かち合うことができました。
- ④ 二人は、親類でした。ですから、三か月ほど一緒に暮らすことが可能でした。
- ⑤ 生まれてくる子どもが男の子であること。そしてその命名です(それぞれの夫に対して語られましたが)。
- ⑥ 二人は、いずれも静かな山村に住んでいる。

(1) マリヤは、エリサベツと同様、レビ族

●なぜマリヤは、受胎告知を受けた後に、ナザレからエルサレム近郊のユダの山地にあるエリサベツのいる所へ赴いたのでしょうか。しかもその距離がかなりあるにもかかわらずです。親類でなければ、そこに赴く理由が他に考えられません。「エリサベツ」は「アロンの子孫」(ルカ 1:5)とあり、「マリヤ」が親類であったということは、この二人はレビ族であり、アロンの家系ということになります(ルカ 1:36)。

●マリヤがユダ族だという伝承も根強くあります。その根拠はルカ 3 章にあるイエシュアの系図が母方の系図だと解釈されているからです。マリヤはレビ族なのか、ユダ族なのか。真実は一つですが、二つの根強い伝

承があるようです。微妙な点もありますが、私の見解を先に述べておきたいと思います。私の見解は前者、つまり「マリヤはレビ族」であるということです。バビロン捕囚帰還後はユダ族とレビ族、そしてベニヤミン族がそれぞれの地に住んだようです。土地を持たないレビ族はユダ族と共に住むことで町や村と一緒に住むことができ、またユダ族はレビ族によって安息日を守ることができたのです。ですから、ユダ族とレビ族の結婚は当然、あり得たはずです。

●ところで、レビ族のマリヤとユダ族のヨセフとが許嫁の関係であったとするなら、そこに神の摂理があったと考えられます。というのは、ヨセフを父とし、マリヤを母とする両親によって育てられた「ナザレ人イエシュア」、「ヨセフの子イエシュア」、「ダビデの子イエシュア」が「神の子イエシュア」であり、第二のアダムであるとすれば、彼はエデンの園を回復される方であるとみなすことができます。イエシュアはアダムに与えられていた「耕すこと」と「守ること」、すなわち、「祭司としての務め」と「王としての務め」を回復する者としてふさわしい働きを完成する者であることを示唆することになるからです。

●ルカの福音書 3 章の系図を見てみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】ルカの福音書 3 章 23～38 節

23 教えを始められたとき、イエスはおよそ三十歳で、人々からヨセフの子とされていた。このヨセフは、ヘリの子
順次さかのぼって、
31・・・・・・ナタンの子、ダビデの子、
38・・・・・・アダムの子、このアダムは神の子である。

●ルカの系図にはダビデまでさかのぼるまで、二、三名を除いて、マタイの系図にある名前がありません。ところが、ダビデ以降は旧約聖書に記されている名前と同じ順序になっています。ここで重要なことは、ルカはどんな意図をもってこの系図を記そうとしたかということです。ルカは、マリヤがヨセフと同じダビデの家系であるということを示そうとしたのでしょうか。新改訳の脚注には、ヨセフの後の名前が「ヘリ」となっていることから、その「ヘリ」はヨセフの義父、すなわち、「イエスの母マリヤの父」と記しています。つまり、新改訳はマリヤの家系がユダ族であるという前提で訳しています。新改訳の脚注を素直に信じるとすれば、ルカの系図はダビデにつながります。果たしてそれは正しい解釈なのでしょうか。

●この系図は、最初に「**イエスはヨセフの子**とされていた」と書かれていて、その後、「ヨセフはヘリの子、それから原文にはない「**順次さかのぼって**」という訳があって、名前だけが並んでいるという形になっています。なぜ、原文にはない「順次さかのぼって」という訳を入れているかと言えば、旧約聖書には「〇〇の子、〇〇の子」という形で、「順次さかのぼって」と訳している(いずれもこのことばは原文にはありませんが)系図が多くあるからです。「順次さかのぼって」ということばを検索すると 20 箇所がヒットします。

●その前に、聖書における系図の表記の仕方は、二つあるということを心に留めておきたいと思います。

以下の **A** はマタイの表記方式で、**B** はルカの表記方式です。いずれも旧約聖書にある系図の表記法です。

A. 「〇〇に◎◎が生まれ、◎◎に●●が生まれ」 (=「〇〇は◎◎を生んだ。◎◎は●●を生んだ」) の方式。

B.「●●は◎◎の子、◎◎は○○の子」の方式です。その最初の箇所を見てみましょう。

① I サムエル記 1 章 1 節

エフライムの山地ラマタイム・ツォフィムに、その名をエルカナというひとりの人がいた。この人はエロハムの子、順次さかのぼって、エリフの子、トフの子、エフライム人ツフの子であった。

※「この人は」というのは、「エルカナ」のことを指しています。順次さかのぼって、エロハムはエリフの子、エリフはトフの子・・・を意味しています。

② エズラ記 7 章 1, 5 節

これらの出来事後、ペルシヤの王アルタシャスタの治世に、エズラという人がいた。このエズラはセラヤの子、順次さかのぼって、アザルヤの子、ヒルキヤの子・・・(5 節)・・・アロンの子。

※「このエズラは」とあるように、前にそのエズラの名前が出されています。そしてそのあとは、すべて「○○の子」というすべて同格のフレーズが続いていますが、エズラは・・・「アロンの子」、つまり「アロンの子孫」とも言えるのではないのでしょうか。

●ルカ 3 章の系図の表記もこれと同じ表記法が使われています。ヘブル語にするなら「○○ בן」となり、右から読んで「ベン・○○」だけでつながっています。けれども、ここを原文で読みますと、「イエスはヨセフの子とされていた」の後には、「誰々の」「誰々の」という言葉がずっと並んでいるだけです。ということは、この系図は、「イエスはヨセフの子」とあり、「イエス」が主格であるならば、「ヨセフの子のイエス」とも言い換えられます。そのフレーズを最初に挙げておいて、ヨセフと同格で「ヘリの子の、マタテの子の、レビの子の」と続けていると理解することができます。つまり、「イエシュアはヨセフの子であり」、「イエシュアはヘリの子であり」、「イエシュアはマタテの子」・・・でもあるということです。

●そのように読むなら、ここに出てくる人々はみな、ヨセフと同じ資格でイエシュアの父であることとなります。それは別におかしなことではありません。聖書では何代も前の先祖のことを「父」と呼んだり、何代も後の子孫のことを「子」と呼んだりすることはしばしばあります。例えば、イエシュアは「ダビデの子」と言われますが、それは直接的な父と子という関係ではなくても、ダビデの子(孫)という意味で使われます。取税人のザアカイに対してイエシュアは「この人もアブラハムの子なのですから」と言われました。それはザアカイがアブラハムの子(孫)であり、イスラエルの民の一員でもあることを意味しています。とすれば、イエシュアはヨセフの子(ヨセフの子のイエシュア)と言うこともでき、ヘリの子のイエシュアとも、・・・ダビデの子のイエシュアとも・・・アダムの子のイエシュアとも、神の子のイエシュアとも言えるのではないかと思います。

(2) ルカのイエシュアの系図の意図は何か

●この系図は**イエシュアが神の子である**ということを強調するための系図のように見えます。その根拠はコンテキストからもうかがえます。この系図の記事の前にはイエシュアの洗礼の記事があります(3:21~22)。イ

イエシュアが洗礼を受けた後に、天からの声があり、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」とあります。イエシュアが「わたしの子」、すなわち、御父との特別な関係にある子、すなわち、**御子**であることが強調されています。そしてまた、系図の記事の後には荒野の試みの出来事(4:1~13)が記されています。そこでも、「もしあなたが**神の子なら**、・・・しなさい。」と、サタンがイエシュアを誘惑しようとして繰り返し語りかけています。順序が逆になりますが、マリヤが受胎告知を受けた時、御使いから「生まれる者は、聖なる者、**神の子**と呼ばれます。」と語られています。ルカは、「ヨセフの子イエシュア」、「ナザレ人のイエシュア」、「ダビデの子イエシュア」が、同時に「神の子」であることを示そうとしていると考えられるのです。これはルカだけでなく、マタイもマルコ、そしてヨハネも同様です。

●また、イエシュアが「神の子」であるという表現は、「神」ご自身に等しいことを意味します。ですから、当時の人々、特に、支配階級の人々がそのことにつまずいたのです。イエシュアが議会で尋問を受けました。

【新改訳改訂第3版】ルカ 22 章 70 節

彼らはみなで言った。「ではあなたは神の子ですか。」すると、イエスは彼らに「あなたがたの言うとおり、わたしはそれです」と言われた。

●イエシュアを「神の子」だと認めたのは、サタンと悪霊たちです。その他は、盲人たちや異邦人たちです。イエシュアが十字架の上で息を引き取ったとき、その十字架の正面に立っていた百人隊長や、「この方はまことに神の子であった。」と言っています(マルコ 15:39)。また、マタイも次のように記しています。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 27 章 54 節

百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「**この方はまことに神の子であった**」と言った。

●イエシュアが語った「あとの者(異邦人)が先になり、先の者(ユダヤ人)が後になる」という格言が、まさに現実となっています。この神の子であるイエシュアを信じて、イエシュアにつながるとき、私たちもイエシュアと同じ神の子どもとされるのです。

2. 主が語られたことばは必ず実現するという信仰

●不妊の女であったエリサベツの懐妊と、処女であるマリヤの受胎という出来事は、預言者イザヤが語った中に啓示されていました。イザヤ書 7 章のアハズに対する「インマヌエル」の預言のしるしとして、主みずから与える一つのしるしは、**処女がみごもって、男の子を産み**、インマヌエルと名づけられるというものでした。これはつまずきの預言です。

●もうひとつのつまずきのメッセージは、54 章 1 節にある「**子を産まない不妊の女よ。喜び歌え。産みの苦**

しみを知らない女よ。喜びの歌声をあげて叫べ。」という預言です。これは直接的には捕囚の民となったユダに対して語られたものですが、イザヤは捕囚による恥辱とその苦しみを「子を産まない不妊の女」、「産みの苦しみを知らない女」という表現で、また6節では「夫に捨てられた、心に悲しみのある女」と言い換えられて、その苦しみと恥を描いています。「子を産まない不妊の女」とは、夫に見捨てられた恥辱を表しています。そんな運命にある不妊の女にどうして「喜びの歌声をあげて叫べ」と命じることができるのでしょうか。それができるのは、ひとえに、「不妊の女に子が生まれる」ことしかありません。ところが主の約束は、「夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多いからだ」としています。常識的にはあり得ない話です。

●預言者イザヤが告げるメッセージの特徴は、彼が神のメッセージを語れば語るほど、それを聞く者たちが心を頑なにするというものでした。そのような働きをいっただれが担おうとするでしょうか。ところが、イザヤはそのために召された預言者でした。イザヤ書54章にある預言もその一つです。そこには、1節の神の約束に基づいて、その約束に希望をもって備えることができるように、その理由がたたみかけられています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書54章2～8節

- 2 「あなたの天幕の場所を広げ、あなたの住まいの幕を惜しみなく張り伸ばし、綱を長くし、鉄のくいを強固にせよ。
- 3 あなたは右と左にふえ広がり、あなたの子孫は、国々を所有し、荒れ果てた町々を人の住む所とするからだ。
- 4 恐れるな。あなたは恥を見ない。恥じるな。あなたははずかしめを受けないから。あなたは自分の若かったころの恥を忘れ、やもめ時代のそしりを、もう思い出さない。
- 5 あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の【主】。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の神と呼ばれている。
- 6 【主】は、あなたを、夫に捨てられた、心に悲しみのある女と呼んだが、若い時の妻をどうして見捨てられようか」とあなたの神は仰せられる。
- 7 「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。
- 8 怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ」とあなたを贖う【主】は仰せられる。

(1) 聖書における「不妊の女」の系譜

●イスラエルの歴史には、「不妊の女」に子が与えられるという系譜があります。つまり、神のご計画は「不妊の女」が子を産むことなしには実現しないということを繰り返し、繰り返し、啓示しています。

- ① アブラハムの妻「サラ」(שָׂרָה)・・・「イサク」の母
- ② イサクの妻「リベカ」(רִבְקָה)・・・「エサウとヤコブ」の母
- ③ ヤコブの妻「ラケル」(רָחֵל)・・・「ヨセフとベニヤミン」の母
- ④ マノアの妻・・・「サムソン」の母
- ⑤ エルカナの妻「ハンナ」(חַנָּה)・・・「サムエル」の母
- ⑥ ザカリヤの妻「エリサベツ」(אֵלִישֶׁבֶט)・・・「ヨハネ」の母

●アブラハム・イサク・ヤコブの最愛の妻たちがみな「不妊の女」であったことは、神の約束が神によってのみ成し遂げられて行くことを教えるための神の配剤と言えます。特に、「サラ」と「エリサベツ」は高齢でした。高齢と言えば、もうひとり、エルサレムの神殿から離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって主に仕えた女預言者「アンナ」もその一人です。彼女の場合、聖書には 84 歳と年齢が記されており、「非常に年をとっていた」と訳されています。使われているギリシア語は「プロバイノー」(προβαίνω)の現在完了形です。「すっかり年齢を重ねてしまった」という意味合いの語彙です。しかも、「アンナ」と「エリサベツとザカリヤ夫妻」に対して使われていますから、エリサベツもアンナの年齢と近い年齢になっていたと考えられます。それにしてもかなりの高齢です。

●祭司ザカリヤとエリサベツ夫妻はどちらも祭司の家系で、ユダヤの伝統を大切にする夫妻でした。もし彼らに世継ぎが与えられなければ彼らの代で家系が断絶することになります。これは現代の私たちが考える以上に深刻な問題です。それゆえに彼らは、世間から「恥」を被って生きていました。ですから、彼らの祈りが聞かれて神から子どもが与えられるということは何よりもうれしいことであったはずで

●ところがです。ザカリヤは、御使いガブリエルの知らせをすんなりと受け入れる事ができませんでした。その理由は、自分も妻も歳をとっていたからだと言えます。子どもを育てるにはかなりの力が要ります。しかし考えてみるならば、イスラエルの歴史において、信仰の父と言われるアブラハムとサラは彼ら以上の年寄りであったにもかかわらず、約束の子が与えられました。そのような話は当然ザカリヤも知っていたはずで

すが、ザカリヤは御使いの言う事をそのまま受け入れることができませんでした。柔軟性を失った老人性の問題なののでしょうか、それともその人の信仰の問題なののでしょうか。いずれにしても、御使いの言われることが実現するまで、ザカリヤはおしにされて、話をする事ができないようにされてしまいました。それも一つの型なのかもしれません。

(2) 母同士の出会い

●受胎告知されたマリヤは、山地のあるユダの町(おそらくエルサレム近郊にあるナザレと同様、山村ではないか)とされています。マリヤはそこに急いで出かけ、ザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつしたとき、エリサベツの胎の中の子がおどり、聖霊に満たされたと記されています(ルカ 1:41)。そのことを示すかのように、エリサベツの口から出たことばは不思議なことばです。歌のような詩文になっていますが、「語るような歌」だったと思われます。



【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 1 章 42～45 節

- 42 そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。
- 43 私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。
- 44 ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。
- 45 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。

●そしてこの後に、「マグニフィカート」(ラテン語)と呼ばれるマリヤの賛歌が記されています。

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 1 章 46～55 節

46 マリヤは言った。

「わがたましいは主をあがめ、

47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

48 主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。

ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。

49 力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、

50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。

51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、

52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、

53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。

54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。

55 私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」

●もし、ですが、46 節の「マリヤは言った」というところを、「エリサベツは言った」と記されていたとしたらどうでしょうか。違和感を抱くでしょうか。実は、古代教会の二、三の写本と教父たちの証言によれば、46 節からの歌は、本来エリサベツの歌であったものが、後にマリヤの口を通して語られるようになったとする証言があるようです。確かに、50 節まではエリサベツでも歌うことができる内容です。しかし 51 節以降はメシアによって実現する内容であり、終末論的です。イエシュアが王として支配するメシア王国の実現を歌うことができるのは、やはり、救い主であるイエシュアを宿したマリヤでなければなりません。

●**不妊であったエリサベツが懐妊した出来事は、不妊の女とたとえられた神の民が再び繁栄を回復する「型」と言えます。**つまり、エリサベツの懐妊は、イザヤ書 54 章で「不妊の女」とたとえられたイスラエルの民に約束されたことが必ず実現することの「型」なのです。その約束とは、以下のことです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 54 章 7～8 節

7「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。

8 怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ」
とあなたを贖う【主】は仰せられる。

●同義的パラレリズムによって、神の約束がより強くたたみかけられています。主がイスラエルの民を見捨て、顔を隠した期間は、主からすると「ほんのしばらくの間」にしかすぎないと言います。むしろ、主は、大きなあわれみをもって、「集める」(新共同訳は「引き寄せる」)と約束しています。また、永遠に変わらぬ愛をもって、「あわれむ」と約束しているのです。そのことをマリヤの賛歌では、以下のように、預言的完了形で記しているのです。不妊の女であったエリサベツから生まれる「ヨハネ」は、主が不妊の女であるイスラエルに

対してなされる「型」と言えるのです。「ヨハネ」はヘブル語で「ヨーハーナーン」(יֹהָנָן)ですが、この名前は「あわれむ、恵む」という意味の動詞の「ハーナン」(נָחַן)に由来し、「ヨーハーナーン」で「主はあわれんでくださる」という意味になります。「ハーナン」(נָחַן)は、「あわれむ、愛する」を意味する動詞の「ラーハム」(רָחַם)の類語です。

●このことを、マリヤの賛歌では「主はそのあわれみ」(「ラーハムの複数形「ラハミーム」רַחֲמִים)をいつまでも忘れないで」としています。

1:54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。

(直訳は「思い起こして」)

(直訳は「助けに来た」という預言的完了形)。

1:55 私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。

(原文には「永遠に至るまで、主が」があります)

●「語られたとおり」とは、神がひとたび約束されたことは決して忘れることなく、実現してくださるということです。私たちは、自分が約束したこと、誓ったことを忘れてしまいやすい者ですが、神はひとたび約束したことは決して忘れません。「私たちは真実でなくても、主は常に真実である。主はご自身を否むことができない。」(Ⅱテモテ 2:13)と使徒パウロは言いましたが、「真実」とは約束したことを必ず守るという姿勢に表われてきます。

●神の約束は、すでに実現したものもありますが、いまだ実現していないことも多くあります。しかし、必ず実現します。神の約束を信じて生きる模範がマリヤでした。マリヤの親戚であったエリサベツは、そのマリヤに対して、「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」(1:45)と述べています。

●新改訳では「信じきった人」と強調して訳されていますが、原文では普通に「信じた人」という言葉です。日本語の「信じた」というニュアンスと「信じきった」というニュアンスでは、信じることにおけるレベルの違いを感じさせますが、聖書の「信じる者は幸いです」の「信じる」とは、普通に「信じる」ことが求められているのです。信じることに力(りき)む必要などないのです。ただ子どものように素直に信じること、そのような人が幸いなのです。自分の理性で考えて頑なににならないように、つまづかないようにしましょう。

●信仰の土台は私たちの側の信じるという力の問題ではありません。それであるならば、「いわしの頭も信心から」ということになります。信心が大切なのではなく、神がご自身の約束をどこまでも果たそうとする、変わることをない「神の真実」に対して、素直に信じる信仰こそ、聖書が言わんとする信仰です。それゆえ、「イエス・キリストを信じる信仰によって救われる」とは、「イエス・キリストの真実に対する信仰によって救われる」と換言することができます。私たちの現実や力により頼むことなく、神の真実な約束を知り、その約束を信じて生きることを選び取ることが求められています。その意味において、マリヤもエリサベツも神の真実に身を浸して生きたモデルと言えるのです。

2016.12.18